

伊吹山もう一つの景観（1）

■ 2008年夏、話題を集めた山頂の花畑

昨夏から今夏にかけ、来山者の誰もが「こんな美しい花畑は見たことがない、なんて素晴らしい！」と感嘆の声を上げ、マスコミも競ってこの場所を撮影し、紙上に掲載する。山頂山小屋東側のくぼ地は、かつて山小屋も測候所もゴミ捨て場や焼却場として利用していたところで、土中には多くのガラス瓶や空き缶、冷蔵庫までも埋もれ、ススキ、アカソ、ヨモギが繁茂していた。

しかし、10年ほど前から山小屋の主人が、これらを抜き取り、整備をしたところ、生育を妨げられていた本来あるべき植物が芽を吹き出し蘇ってきた。もちろん、シモツケソウ等は株分けをして区域内での分布を広げたとも言う。ここには100種近くが数えられ、植物の多様性にとって望ましい管理と手入れがなされてきたように思われる。



2008.08.03



2008.08.10



2008.08.07

■ 2006年、アカソ、ヨモギ、イタドリを除去した第一保全区（旧測候所北側花畑）の現況



ほとんどがアカソ、ヨモギ、テンニンソウで覆われていた。
(除去前) 2006.08.06

旧測候所北側の約600㎡の花畑は、本会の前身「伊吹山自然観察会」が2006年と2007年10月にアカソ、テンニンソウ、イタドリ、ヨモギの根抜き作業を行った。この4種は、この区域で優占種となっていて、草丈が高く本来あるべき多様な植物の生育を阻んでいた。除去前の調査(2006.06-11)では67種を数え、除去後(2008.05-08)では94種を数えた。このように比較的狭い面積に多数の種が蘇り生育してきている。本会としては、今後もこの区域のモニタリングと調査を実施し、再生と復元の第一保全区として、指標を定め保全事業を進めていく方針である。



アカソ、ヨモギは殆どないが、テンニンソウの萌芽が目立った。
(除去後1年) 2007.08.25



08.07の調査では94種が確認できた。
(除去2回後の1年) 2008.07.06

伊吹山もう一つの景観（2）

■景観・文化の多様性

景観は、自然によってのみ作られるものでもなく、人文・社会面の様々な要素が相互に関連しながら総合的に形作られている。つまり景観とは、自然のもの、人工のものを問わず、一体となって形成されているものである。また、景観は文化・伝統を反映しているため、地域の特徴も強く示している。

伊吹山は、古来より山岳信仰の山として知られ、山頂には日本武尊像や南・北に弥勒堂があり、山頂の土中からは江戸から明治時代にかけて広く流通した銭貨「寛永通宝」が何枚か発見されている。

また、大正8年から平成13年までの88年間、山頂で観測を続けてきた伊吹山測候所の建造物（3代目）は、すでに山頂の象徴として位置づけられている。（※しかし、その外壁の老朽化は、激しく見苦しい。）

このような伊吹山の歴史性を物語る固有の文化は、自然と人が織りなす多様な環境といえ、生きものが生息する空間・場の重なりや広がりが多様になることにつながる。しかし、伊吹山の現状は、伊吹山ドライブウェイやゴンドラを利用し気軽に登れる山として多くの来山者が訪れる反面、かつての景観は急激に変化しつつある。今、私たちは、一つの視点だけでなく様々な視点から景観・文化の多様性のバランスを考えながら保全していく必要がある。



▲日本武尊像は、山頂の象徴となっていて多くの来山者の撮影箇所となっている。しかし、その石積みはところどころ浮いて、危なく補修が急がれる。



■問われる景観

旧測候所は、老朽化し外壁の塗料がはがれ落ちている。▶



▲ 8合目駐車場のカラフルな案内板



▲ 山小屋のカラフルなPOP用「のぼり旗」



▲ 積上られ放置された丸太、見苦しく危険を感じる



▲ 8合目駐車場の観音像



▲ 8合目駐車場の自動販売機



▲ 役立たない植物案内プレート



▲ 老朽化した注意札